同時代史としての団塊世代（後編）

― その現在そして近未来へ ―

天沼　　香

［3］団塊世代の時代背景（2）

1．高度経済成長期前期あるいは団塊世代の青年時代前期

高度経済成長・所得倍増計画　60年安保闘争は、日本における権力支配層に対する最大級の民衆の闘争であった。そればかりか、東西冷戦構造が固定化していく初期の段階における、民衆の平和と公正な政治のあり方を希求する闘争としては、世界史上に名を残すものと言えよう。

それ程に、この闘争には、数多くの学生、労働者、市井の主婦等々、広範な人々が主体的に参加したのだった。、結果として、この60年安保闘争は、新安保条約の発効を許すことになってしまったものの、多くの民衆の声を無視し、「声なき声」という実態があるのかないのか分からないものを楯にした岸信介内閣の存続は許さなかった。

岸の後を継いだのが、「中小企業の倒産や自殺やむなし」だの「貧乏人は麦を食え」だのと、よく舌禍事件を引き起こす池田勇人だった。

しかし、そういう人物であっただけに総選挙向けのテレビ・コマーシャル「私は嘘を申しません」等の少し愛嬌のある言葉もそれなりに似合うのだった。池田には、しょっちゅう庶民をコケにする割に、庶民に好感を持たれるようなところがあった。岸政治で、国民の信望と人気を失った自民党の人気回復にはうってつけの人物だったといえよう。

この「私は嘘を申しません」は、団塊っ子の間でも、結構な流行り言葉だった。私たちの仲間うちでも、この言葉を子どもなりに当意即妙に用いては、笑い合っていた。

池田首相は、吉田学校の優等生として、第三次吉田内閣や石橋湛山内閣でも蔵相を務めた財政通だった。その池田の内閣は、日本経済が高度成長の渦中にあったという僥倖もあって、大いに国民の耳目を引く所得倍増計画を発表する。

1955年（昭和30）から1970年（昭和45）にかけての日本経済の成長率は実質年率9.7％で、その間に国民総生産は3倍になった。55年の粗鋼生産900万トン、乗用車2万台、TV 13.7万台だったのが、70年には各々、9,300万トン、300万台、1,250万台。55年における農林業従事者の比率は39％だったのが、70年には18％に激減。高校進学率は51.5％から82.1％に上昇。都市人口比率は56％から72％に増大。一世帯当たりの平均人数は4.9人から3.6人に減少（以上の数字は香西泰『円の戦後史』［1995、日本放送出版協会］による）。

上の数字が端的に示すように、この時期、およびその前後数年間は、社会の諸状況が激変した時期だった。この激変の時期こそ団塊世代が少年少女から、青年へと成長し、社会人になっていく時期であった。

その日本経済が上り調子のさなか、1960年11月、第29回衆議院総選挙で大勝（自民党296議席）した池田は、第2次池田内閣を発足させ、翌12月に国民所得倍増計画を閣議決定した。日本現代政治史上でも稀に見る時宜に叶った、民心を捉える策定だったといえよう。

他方、同年10月、革新陣営は右翼少年の凶刀により社会党委員長、浅沼稲次郎を失った。安保闘争が終わりを告げ、経済のことは自分に任せよという池田が首相になり、大衆動員にも力を発揮した浅沼が政治テロに倒れたことは、日本が「政治の季節」から「経済の季節」へと大きく転回していく際の象徴的な出来事であった。

田舎の団塊っ子中学生たち　この時期の丁度半ば、1963, 64, 65年頃、前編第1章第3節で触れたKさんやLさんたち、中卒の団塊世代が「金の卵」として、地方から大都会に大挙、吸い寄せられて、単純作業に従事することになる。この時期、二十数万人に上る中卒の団塊っ子たちが、高度経済成長の最底辺の担い手として、貴重な労働力になっていったのだった。

私の茨城県東海村の小学校時代の同級生たちで、この時期に中学校を卒業、上京して、あるいは隣接する日立製作所の城下町、日立市で働き始めた者も少なくなかった。日立だと、十分、自宅から通えるという利点があった。この頃の日立市は、日製のみならず、日本鉱業等、大企業の事業所も操業しており、家電製品の増産ブームもあって、茨城県都・水戸市を優に凌ぐ殷賑を極めていた。

他方、そのまま家業を継いで、農業に従事する者もいた。何しろ、小学校に「農繁休暇」という休みの日があり、小学生たちも田植えや稲刈りなどに動員されていた時代のことだ。脱農業化が顕著になり始めていたとはいえ、同級生たちのうち、殊に長男の連中では農家を継ぐ者もまだ多かった。

「俺は長男だっぺ。んだから外には出られねえべよ」と子どもながらに、諦観的に語って、農家を継ぐ覚悟を決めた同級生は、「金の卵」として東京や日立に働きに行く同級生（次三男が多かった）を羨ましげに見ていた。

親がかりで高校生になった私も、なぜか彼らを眩しく感じたものだった。自分で生活の糧を稼ぐことが出来る立場に対する羨望だったのかもしれない。

高校に進学する者も半数近くはいた。彼らの多くは農業高校や工業高校に入った。3年後、殊に後者の卒業生は、日立製作所や日本鉱業、さらには、日本原子力研究所や原子燃料公社の後身、動力炉・核燃料開発事業団等に就職する者もいた。各事業体も、地元出身者の採用には前向きだったのだ。もちろん、そうした所に就職できたのは恵れていた方で、より多くは中小企業に就職した。

ちなみに、私の京都の小学校時代の同級生たちの90％近くは中学校を卒業すると、当然のように高校に進学した。京都と茨城県東海村との単純な比較からだけでも、都市化、重工業化が進む中で、高校進学率等に関する地域間格差の進行が顕著だったことが判然とする。

都市への人口集中、過疎化・過密化の進行、公害問題の深刻化なども、この時期に顕在化していくことになる。

地球は青かった・キューバ危機・ケネディの死

1961年4月、ソ連が世界初の有人人工衛星船ボストーク1号打ち上げに成功した。搭乗していた宇宙飛行士ユーリ・ガガーリン少佐の「地球は青かった」という一言は、当時、思春期の真っ最中だった団塊世代の気持ちを高揚させた。太陽系の惑星としての地球への関心、宇宙への関心はいや増しに増していった。

余談だが、後日、ガガリーン飛行士が来日した際、彼が日本国内で乗った飛行機の客室乗務員をしていた叔母は運良く彼のサインを貰った。私は、それが「輝く未来からの手紙」、「宇宙からのメッセージ」のように思えて・・・欲しくて欲しくてしようがなかった。

ボストークの成功から程なく、アメリカ合衆国も有人ロケット飛行を成功させた。この頃の団塊世代は、まだ、これらが、米ソの果てしない軍拡競争の一環だったことまでには思いは至らなかった。

けれども、大人たちのみならず、団塊世代の間でも、アメリカ合衆国という超大国に対抗しうる、カウンター・パワー、カウンター・カルチャーの保持者としてのソ連という国への関心が高まった。

その関心は、6月のケネディ米大統領とフルシチョフソ連大統領のウィーン会談、8月、東京での日本初のソ連工業見本市開催、さらには翌62年10月にピークを迎えたキューバ危機等により、高まる一方だった。

キューバ危機の際、団塊世代は教室で同級生たちと、自分がケネディだったらどうするとか、フルシチョフだったらどうするとか、侃々諤々、喧々囂々、議論を展開したものだった。団塊っ子は、東西冷戦構造の申し子でもあった。

東西冷戦構造下、一触即発の危機を回避し、

第三次世界大戦を未然に防いだ（と感じられた）ケネディ米大統領とフルシチョフソ連大統領を、団塊っ子たちは、ちょっとミーハー的に英雄視していた。ハンサムなケネディは団塊っ子女生徒の憧れの的で、したがって自分の未来をジャックリーン夫人に重ね合わせ夢見る女生徒なども少なくなかった。

であるから、翌1963年（昭和38）「いい夫婦の日」（11月22日）に、テキサス州ダラスで、ケネディが凶弾に倒れ、ジャックリーン夫人が「オー・ノー」と悲痛に叫んだ事件は、団塊っ子中学生の胸に深く刻まれている。

東京五輪・北爆・家永教科書訴訟　1964年（昭和39）の日本の表向きは、華々しかった。4月には、海外旅行が自由化され、この年は第二の開国の年とも言われるようになる。9月には、日本初の名神高速道路が全面開通、翌10月には東海道新幹線が開通、同月には第18回オリンピック大会が東京で開催というように、高度経済成長下で日本の繁栄が謳歌された。

しかし、裏では、日本政府は、民族自決に反するアメリカ合衆国のベトナムへの介入が深刻化するなかで、ベトナム戦争への協力を確約し、米原子力潜水艦の日本寄港も容認した（ベトナム戦争に関しては、当時、国防長官だったジョージ・マクナマラですら、後日、その誤謬を認め、自己批判している）。

さらに日本政府は、日韓の学生や民主勢力が反対するなかで日韓条約締結にむけての交渉を進めていた。

1965年（昭和40）2月、アメリカ合衆国は、北爆を開始、ベトナム戦争の泥沼化に拍車を懸けた。同年の年4月、私は、団塊っ子高校生になった。そして、1クラス55人のすし詰め教室に入れられた。何やら収容所みたいだった。

多感な高校生だった私は、強大な国家権力が、強大な軍事力を駆使して、自国に不都合な他国を崩壊させようとして、その国の老若男女を問わぬ無辜の民に砲弾を浴びせ、虫けらの如く逃げまどわせ、殺傷する光景を目の当たりにして、ただただ憤りを感じていた。

その胸中の怒りを、どこにどうぶつけたらよいかも分からないうちに、その秋、北関東弁論大会に出場する機会を得た私は、「北爆を論ず」と題して、生半可な知識と現状認識のままに弁舌を弄し、右翼系の生徒たちからの厳しい批判に晒された。

同年6月には、日韓基本条約が調印され、年末の衆参両院における強行採決を経て、同条約は批准された。

同じ6月、家永三郎東京教育大学教授が教科書検定第一次訴訟を起こした。自らが著した歴史教科書に対する国家権力の介入（文部省検定調査官による検定）を違憲として、日本国に対して賠償を請求するというものだった。

同教授のこの訴訟は、歴史学者、歴史教育関係者らを中心に「教科書訴訟を支援する全国連絡会」が結成されるなど、広範な支持を得、その後、67年6月には、検定不合格処分取り消しを旨とする第二次訴訟等も提訴されるなどしながら、三十数年に渡って続けられた。

これは、同教授の「戦前戦中において、戦争に対して批判的な認識を心中に宿しながら、沈黙を保つというかたちで、結局は戦争に協力してしまったことへの反省の念から出た実践活動」だった（家永教授が東京教育大学大学院のゼミや個人的な語らいの中で語ってくれた言葉の要諦）。

ビートルズ・サルトル・GS・紀元節　団塊っ子高校生たちにとって、1966年（昭和41）の関心事は、国際的なベトナム反戦運動の高まり、ザ・ビートルズの武道館公演、ジャン・ポール・サルトルとシモーヌ・ド・ボーボワールの来日、そして中国の文化大革命だった。

相変わらずベトナム反戦運動にどのように主体的に関わっていけばいいのかという課題を残しつつ、ザ・ビートルズやザ・ベンチャーズのエレキサウンドにしびれ、自前のバンドを結成してみたりしながら、サルトルやボーボワールの難解な書に取り組み、文化大革命の推移に驚嘆の目を向けるといった日々だった。

当時、大人たちは、エレキ＝不良という烙印を押したがったが、後に、ビートルズが、ベートーベン、バッハ、ブラームスとともに4Bと並び称されることになったことを思えば、若者の感性、音楽性の方が、大人たちより鋭かった

ことになる。

ＧＳブームを支えたのも団塊世代だった。グループ・サウンズのメンバーにも、あのザ・タイガースのジュリー（沢田研二）、トッポ（加橋かつみ）、サリー（岸部一徳）、ザ・スパイダーズの井上順、ザ・スウィング・ウエストの湯原昌幸らを始め、団塊世代が多かった。

ちなみに、団塊世代からは、ＧＳ以外にも、高田渡、中川五郎、泉谷しげる、大滝詠一、矢沢永吉、細野晴臣、南こうせつ、元オフコースの小田和正、元アリスの谷村新司、堀内孝雄、元フォーク・クルセダースの加藤和彦、井上陽水等々、錚々たるミュージシャンがキラ星の如く輩出して、日本の音楽シーンに光彩を放っていった。

1967年（昭和42）２月11日、紀元節が「建国記念の日」と名を替えて復活した。これに対する抗議の意を込めて、東京大学や東京教育大学等では、学生や教官の有志が陸続として登校した。

この、歴史ではなく神話に基づく国民の休日の設定に強く反対した和歌森太郎東京教育大学教授は、「歴史の真実を探究する者として、その良心に懸けても、これだけは阻止したかった。戦前の皇国史観の復活に繋がりかねないからだ。慚愧に耐えない」と大学院のゼミや個人的な語らいの中で何度も述懐してくれた。

確かに国家が、率先して歴史と神話とを意図的に混同させ、特定の史観を人々に押し付け、アプリオリにその人々の歴史観形成に関与するのは極めて好ましくないことと言わざるを得ない。

２．60年代後半から70年代初頭あるいは団塊世代の大学闘争期

公害がもたらした語られなかった悲劇

1967年（昭和42）６月には、東京教育大学評議会が、文学部等の強い反対にも関わらず、筑波研究学園都市への移転を決定した。これは、東京教育大学の廃学、文部省構想に基づく新大学の創設に繋がっていく措置だった。

創設とはいえ、有力な大学を無から造ることは困難なので、既成の有力大学である東京教育大学の組織を解体し、再利用、再構築しながら、理科系を大きくして筑波大学が立ち上げられることになったのだった。

団塊っ子大学生、わけても東京教育大学の学生たちは、否応なくこの渦中に巻き込まれることになる。筑波移転反対闘争は、東京教育大学における闘争の一つの核になったからである。

67年９月には、高度経済成長の最たる負の遺産としての公害に耐えかねた四日市市の喘息患者の人たちが、石油コンビナート各社を相手取って慰謝料請求の訴訟を起こした。

そのちょうど二年後、私の同級生だった四日市出身の女子学生Ｘさんは、忽然とクラスの仲間たちの前から姿を消した。

誰にも、その理由は告げられてはいなかった。美人で、少なからぬ男子学生たちが想いを寄せていた人だっただけに、キャンパスでは恋愛がらみの失踪かなどという噂がまことしやかに流れていた。

後日、Ｘさんは、その理由を語ってくれた。四日市喘息のために両親が相次いで亡くなり、看病疲れと悲しみのなかでいたたまれなくなって、学業を続ける気力もなくなり、学資も続かなくなりそうだし、あれこれ人に知られるのも嫌なので、人知れず、ひっそりと退学し、私たちの前から消えることを決心したという。

公害は、彼女の両親のみならず、向学心に富んだ有能な一人の学生の輝く未来をも奪ったのだ。公害が原因で発症し、亡くなった人々、病に苦しむ人々のみならず、公害はこのような表面には出ない犠牲者も無数に輩出していたのである。

10月には、佐藤栄作首相のベトナム訪問反対の闘争が、全共闘系学生を中心に繰り広げられた。羽田空港周辺に集結した数千人の学生大衆に、警官隊がガス弾を発砲、その混乱の中で隊列にいた京都大学生の山崎博昭さんが死亡した。彼は大学に入ったばかりの団塊世代だった。60年安保闘争時の樺美智子さんに次ぐ犠牲者だった。

昭和元禄時代の団塊っ子浪人生　1968年（昭和43）という年は、極めて多彩な年だった。

一面では、「昭和元禄」などと称され、カラーテレビ、自家用車、冷房機が各家庭に行き渡り、国民総生産が、アメリカ合衆国に次いで世界第二位になった年である。

長らく続いた日本の高度経済成長が様々なひずみを残しながら、漸く終わりに近づきつつあった時期、換言するなら、その高度成長の伸びきった時期、さらに換言するなら、その高度成長の極相期だったのである。日本史上、総体としての日本が、経済的、物質的には最も豊かになった時期だったといえよう。

他面では、この年半ばに、厚生省が、富山のイタイイタイ病、熊本の水俣病、新潟の阿賀野川の水銀中毒それぞれの公害の淵源は、三井金属、チッソ、昭和電工の工場廃水等であることを公表、遅まきながら、高度経済成長の負の側面があぶり出され始めた時期でもあった。

さらに、同年１月には、東京大学医学部の学生が無期限ストライキに入り、３月には安田講堂が全共闘系学生によって占拠され、同月の東大卒業式は中止、年末には入試の中止が公表された。全国の高校３年生たちが「ああ、ああああ～高校３年生・・・」と歌ったかどうかはともかく、受験戦略の練り直しを迫られた。前年、大学入試に失敗していた浪人生も同様だった。

しかし、東京大学、東京教育大学、東京外国語大学等の入試中止という前代未聞、空前絶後の事件によって、受験生たちはまともに多大な影響を受けることは必至だったが、その要因を作った団塊世代を恨む気にはならなかった。

「彼らも、資本主義社会の矛盾、大学という最も民主的であるべき組織の封建的な事大主義等に鉄槌を下そうと命を賭して頑張っているんだ」というような、団塊世代に対して好意的な見方をしていた団塊最末期の浪人生が多かった。

自分たちの受験に関しては不利、不都合な事は日の目を見るより明らかではあるけれど、そんな自分の利害だけで大局を見失ってはいけないといった見解が、薄暗い予備校の廊下や教室に飛び交っていた。

経済的豊かさが喧伝される反面、その豊かさの陰で、利潤追求優先の大企業が垂れ流し、撒き散らす有害物質を含む廃水や煤煙等と健康被害との因果関係も次々と明らかになり、また団塊世代を中心とする学生たちによって担われた大学闘争が激化の一途を辿るなど、社会的には不安定な時期だった。

国際的に見ても、この年は、ベトナム戦争が転換期に差し掛かり、米軍による住民大虐殺事件としてベトナム史上に名を残すソンミ村事件（３月）が起きたり、「プラハの春」がソ連軍戦車によって蹂躙（８月）されたり等、米ソ両超大国の横暴が顕著に目に付いた年だった。

マーティン・ルーサー・キング牧師が暗殺（４月）されたのもこの年だった。黒人と白人の相互理解と共存を夢見たキング牧師の死は、異人種間の和解の難しさを端的に物語る事件として、私には極めて衝撃的に受け止められた。

彼の死を悼む団塊世代は多かったようで、私たちは、彼の「I have a dream」の文章を諳んじ合ったりしたものだった。キング牧師のこの文章と、ジョン・F・ケネディの大統領就任演説の文章とは、私たちが追悼と受験対策とを兼ねて暗記した英文の双璧であった。

新左翼学生の抜きがたいエリート意識　明けて1969年(昭和44)、受験界が混乱するなかで、入試の季節が始まった。やはり東京大学の入試は実施されないことになった。

私と同じく団塊世代で、既に東大生となり、最過激派セクトに属していた親戚の男Ｆは、前編プロローグでも言及したように、「東大の入試が１年なくなるという事は、東大の卒業生が１年、世に出ない事を意味する。これは、ゆくゆく日本社会にダメージを与えずにはいない大成果だ。これで日本は大きく変わっていくだろう」と豪語していた。

彼のセクトが東大入試阻止に向けて、どれだけの力を発揮したのか、私には分からなかった。最終的に、東大入試の全面的中止を決定したのは、直接的には、政府・自民党、坂田道太文部大臣の圧力による加藤一郎東大総長代行の苦汁の選択の結果のはずだった。

そう言う私に対して、しかし、彼は、「そういう事態に立ち至らしめたのは我々の命を賭けた闘争の成果なのだ」と言い張った。それは、

その通りかもしれなかった。

けれども、政府・自民党が、もし東大入試中止が現体制維持にとって著しい不利益をもたらすものと判断したなら、何としてでも、いかなる手段を講じてでも東大入試実施に向けて策を弄するだろうと私は思っていた。

そうしなかったという事は、むしろ政府・自民党の方が、１年くらい東大入試がなくなっても大勢（体制）に影響はないと読んでいたのかもしれない。あるいは、入試を実施して、それが混乱すれば、自分たちの威信が失墜することを恐れたのであろう。

いずれにせよＦの話に端的に示されたような、受験競争社会的観点からの「東大神話」話はやはり私には首肯しえなかった。

東京大学という最高学府中の最高学府の権威、権力を否定しようとして戦っているはずのＦたちが、その東大の権威を自ら是認するような発言をしたことは、彼らの行動が自分たちに不利になることは十二分に知りながら、彼らの行動を眩しく肯定的に眺めていた私に大きな失望感を与えた。

Ｆは、自らの自己矛盾を認めたくないようだった。私は、当時、全共闘系の学生たちの間で流行っていた（というと語弊があるかもしれないが）「自己否定」の論理も、徹底したものではない、自らの特権的立場までをも完全に否定し去ろうというものではないなと感じさせられていた（この辺りの記述は、私の 1968 ～ 69 年当時の日記等に基づく）。

もちろん、Ｆ一人の言動を以て、すべての新左翼の認識、志向を代表させるつもりは毛頭ないけれども。

団塊っ子大学生たちの大学　そんな状況のなかで、取り敢えず私たち団塊最末期世代は、大学生になった。

入学早々、私たちを待ち受けていたのは、クラブ勧誘ではなく、セクトの勧誘だった。

私の入学した大学の全学学生自治会の主流は、民青系だった。多くの新入生は、自動的にそちらの側に付く傾向がなきにしもあらずだった。

だが、私の属した学科に入ってきた連中は少し違っていた。高校時代から、高校闘争を主導してきた男、小田実に心酔して「ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）」運動に関わってきた男、バリバリのパリのニューレフト（新左翼）風を装う女、地下組織に近いような、世に言う超過激派に属しているらしい男、ノンセクト・ラディカルを自称する女、直接行動はしないようだが、恋人が全共闘の闘士であることを仄めかし、自らはその後方部隊と位置付けていた女、いわゆる心情三派の女等が結構、多かったのだ。

先に触れた、四日市公害で両親を亡くしたＸさんも、このクラスの一員だったが、彼女の思考も独特のものだった。

「仲良し革命ゴッコみたいでいながら、そのクセ代々木からの上意下達が徹底してる民青はイヤやけど、でも極左冒険主義的、左翼小児病的で自己陶酔的なニューレフトも、も一つピンとこうへんわ。・・・（文化大革命の）紅衛兵はアホらしいほど子どもっぽ過ぎるやんか。そやけど、造反有理、革命無罪やらのスローガンは何や知らんエエなあと思うてんねん」等々と、彼女を勧誘する両陣営を前に公言して憚らなかった。

どちらの陣営も、見栄えのする美形の彼女を、ジャンヌ・ダルクか、はたまたライラ・ハリドに仕立て上げたがっている様子は見え見えだった。

クラスには他に、コテコテの民青もいれば、全くのノンポリも、ただただガリ勉もいた。そんな調子だったので、私はクラス委員になったものの、このクラス全体をまとめるのは至難の業だった。

学生たちによる学内民主化と彼らの学外行動

ご多聞に漏れず、キャンパスには、全共闘系、民青系の立て看が立ち並び、「われわれは～」のアジ演説は学内に響き渡っていた。

しかし、両陣営による、あるいは中核と革マルとによる、あるいはその他のセクト同士による血で血を洗うような内ゲバが展開される悲惨な事態には立ち至らずに済んだ。

なぜなら、当時、この大学には、比較的、民主的な教員が多く、学生の学内民主化要求などにも誠意をもって応えるようなところがあった

からだ。権威主義的な教員は多数ではなく、学科のカリキュラム改革に学生を参加させるといった要求も受け入れられていた。私も学生委員として改革に参画した。

大学内での、こうした改革の動きを微温的、欺瞞的、「ナンセーンス」という向きもあったが、この教員と学生双方の代表が集ってのカリキュラム改革には、全共闘系学生、民青系学生がともに一堂に会したこともあった。

こうした事実をも又、全否定し、学生運動に肯定的な立場を取る教員に対しても「反体制エスタブリッシュメント」として偽善者扱いする向きもあったけれども。

私たち団塊っ子大学生は、よく学外のデモに参加した。

学内の問題は学内でと考えていたこともあって、デモのスローガンは、大学固有の問題というより、沖縄返還要求とか、安保粉砕とかいった、国家体制に関わる、より社会的な大きなテーマが多かった。

夜、他大学のデモ隊と合流して、デモ行進をしていると、私たちはカメラのフラッシュの放列を浴びることがあった。すると伝令が飛んできて、「顔を伏せろ、顔を隠せ」と言って回っていた。

後で、反省会のような場で、「自ら正しいと信じて行動をしているので、何らやましいところはない。したがって、顔を伏せたり、隠したりする必要はないではないか」と主張したことがあった。

対して、手練れの指揮を執る立場の上級生らから、「甘いぞ。想像力を逞しくしろ。官憲は我々の写真を撮影しておいて、徴兵制を敷いた暁には、写真で照合して、デモ参加の我々をまず召集し、戦場に送るのだ。それくらいのことに思いを至せなくてどうする」と怒鳴られるのだった。

これが事実なのかどうか私には分からなかったが、デモの隊列に向けてフラッシュを光らせるのは、一種の威嚇であることは明白だった。

学生たちのヒロイズムと寅さんの出現　この頃、周辺では、それまでつけていた日記を廃棄したり、新たに日記を書くのは止める学生が増えていた。

他大学に進学した男からは、「(自分の) 電話は官憲に盗聴されている危険性があるから、微妙な話は電話で話すのは止そう。下宿も危ないから、外の喫茶店で話そう」などという申し出があったりした。

今にして思えば、これらは警戒心の強さや心配性のゆえというより、自分を実像以上に大物に見せたがるような、悲愴なヒロイズムのような心境ゆえに語られたものと指摘することも出来よう。

ただ真剣に闘争に取り組んでいた学生たちは、それ程、深刻に身辺に身の危険を感じていたことも事実だった。

少なからぬ真面目な団塊っ子大学生たちにとっては、既成の権威・権力に対する反体制闘争の時代だったのだ。企業社会 (資本主義) が、公害というようなかたちで矛盾を露呈し、大学という民主的であるべき空間が意外なまでに非民主的な階層社会であること (殊に医学部) が露呈していた時期だけに、純粋な学生たちは、その変革を求めたのだった。

「人間としては、優しいとてもいい人だけれども、その人が機動隊員として、ジュラルミン製の楯と警棒を持って自分に殴りかかってきたらどうするか」などというテーマで、しごく真面目にクラス討論が行われたりした時代だった。

京都大学を訪ねると、百万遍から東一条に至る塀の内側には、何メートルかおきにヘルメットに覆面をしてゲバ棒を持った学生闘士が立って、内外を睥睨 (へいげい) していた。

彼らは、自らがエリート予備軍であることまでをも放擲 (ほうてき) して、完全な「自己否定」の上に、あの場に立っているのだろうかという一抹の疑念が当時の私の日記に記されている。

この年、1969 年には、山田洋次監督、渥美清主演で、後、48 作まで続くことになる映画「男はつらいよ」シリーズの第 1 作が封切られた。これが、全共闘系学生の間でも大変な人気映画になった。

その理由は、以下の叙述に尽きる。全共闘系の学生たちは「フーテンの寅の、経済効率万能

の産業社会の論理に背を向け、『頑張らない』で、自然体で生きている有様、ルンペン・プロレタリアート的なバガボンド性、小なりとはいえ、その資産継承権を拒否しているような態度等に限りなく引きつけられていった」（拙著『日本人はなぜ頑張るのか～その歴史・民族性・人間関係～』2003、第三書館）のである。

ちなみに、1965年以降、学生運動華やかなりし頃に、18作品が封切りされた伊藤一原作、高倉健主演の映画「網走番外地」シリーズも、団塊世代を中心とする新左翼、全共闘の若者たちに圧倒的な支持を受けた。主演の健さんのかっこよさもさりながら、主人公の世間から白眼視されながら、己の信ずる道をひたすら歩むアウトロー的な生き方に、自らの生き方を重ね合わせた若者たちも多かった。

かくいう私自身、この2つのシリーズは、欠かさず観に行ったものだった。

3．挫折・優しさ・生産年齢へ・そして定年へ

戦い済んで、夜は明けず　岡林信康は、「友よ、夜明け前の闇の中で、友よ、戦いの炎を燃やせ・・・夜明けは近い・・・」と歌っていた。私たち団塊世代も、その歌を学生集会等で唱和しては気勢を上げていた。

しかし、ついに夜明けは訪れないままに1970年後半、71年、72年と大学闘争は徐々に終息に向かっていった。「無精ひげと髪を伸ばして、学生集会へも時々、出かけた」（「いちご白書をもう一度」［松任谷由実:曲、バンバン:歌］）りしていた連中も、ユーミンの歌詞と順序が逆だが、髪を切って就職活動をして、働く場所を確保して、大学を去っていった。

その頃から、よく聞こえてくるようになったのが、南こうせつとかぐや姫の「神田川」であり、「妹よ」であった。「怒りの世代」だった団塊世代は、変革の夢破れ、挫折感に苛まれながら、自ずから「優しさの世代」へと移ろっていった。

歌は世につれ、世は歌につれ・・・とは巷間、よく言われるところだが、団塊世代の人生行路もまた、その例外ではなかった。

1970年代に入って、学園内での闘争が弱まっていくのに反比例するように、超過激派の動きは尖鋭化していった。

70年（昭和45）3月、大阪で万国博が開催されたのを、待ち受けていたかのように、その直後、赤軍派の田宮高麿ら、9名の学生たちが日航機をハイジャックして、韓国ソウルで乗客を解放した後、北朝鮮平壌に入った。

5月、米軍はベトナムで一旦、中止していた北爆を開始した。それに対して、アメリカ合衆国内では、全国で学生たちによる反戦デモが激化、この混乱のなかで州兵がデモ隊列に発砲、4人が射殺される事件が起きた。同事件が、あのコロンビア大学を舞台にした映画「いちご白書」のモティーフになった。

三島由紀夫の死　6月、日米安保条約を自動延長する旨の政府声明が出され、対して全国で反安保集会、行動が盛り上がる。学生と労働者、市民の連携も見られた。この時は、大学闘争との関連の中で、大勢の団塊っ子大学生たちが学外に出て、労働者や市井の人々等と連帯しつつ反体制的な運動に主体的に参画した最後の大きな山場だったと位置付けられよう。

翌7月には、先に触れた家永三郎東京教育大学教授が国を相手取って提訴した教科書訴訟（第2次）で、東京地裁は、家永教授著の教科書に対する検定は憲法（および教育基本法）違反と明言する画期的な判決を言い渡した。世に杉本判決として名高い。教育の民主化を推し進めようとする人々を勇気付ける判決だった。

家永教授自身も、「私の訴えを支援してくれる多数の人たちがいることや、法曹界にこのような公正でリベラルな人物がいることは、日本にとって大いなる救いです」と述べている。又、多くの人々から、「家永先生、頑張って！」と励まされたと苦笑交じりに語ってくれた（家永教授との個人的な語らいの中での氏の発言）。

この年の締めは、何と言っても11月末の三島由紀夫の割腹自殺だった。東京、市ヶ谷の自衛隊東部方面総監部で、自衛隊に決起を促す演説をした後、三島は割腹、楯の会の森田必勝に介錯させて果てた。

これは、三島の個人的な美学の貫徹に過ぎず、何ら大勢に影響を及ぼすものではなかったはずだ。しかし、この喜劇的悲劇の自作自演者が、年齢層を問わず、その華麗な文筆ゆえに多くの愛読者を有する人気作家だったことが波紋を広げた。しかも彼は、将来のノーベル文学賞候補者に擬せられていたのだ。

右翼の側における、こうした動きに鋭く反応したのは、他の右翼ではなく、新左翼だった。組織的でもなく、実質的には、さほど大きな影響を後に残さないであろうとは思われたが、一人プラスαの少人数の決起で、右翼の存在を広く世の人々に知らしめたという点では、この三島の割腹事件の効果は絶大だったからである。

新左翼の陣営には、自分たちの陣営は、三島由紀夫一人にしてやられた・・・、三島一人の行動に匹敵するような顕示的な行動を世に示すことも出来なかった・・・というような無力感が流れた。

超過激派の論理　1971年が過ぎ、1972年(昭和47)に入ると、1月にはグアム島で、元日本兵の横井庄一さんが発見され、2月早々に帰国を果たした。戦争の残酷さ、恐ろしさを予期も出来なかったところから照射されたような気がして、「戦争を知らない子どもたち」である団塊世代は彼の言動を凝視した。

横井さんが話題になり、札幌で開催された冬季オリンピックが話題になったのを、吹き飛ばすかのようにして世間の耳目を引きつけたのが、2月に起きた浅間山荘事件だった。

連合赤軍が浅間山荘に人質を取って立て籠もり、包囲する警官隊との間で銃撃戦が展開された。京浜安保共闘と赤軍派との連合部隊だった。組織の先細りに危機感を覚えた両派が野合した等の推測がなされるが、なぜ、この両派が結びついたのか、真実のところは分からない。テレビが、その模様を事細かに報道するので、本筋を離れたところで、お茶の間の恰好の話題になった。

その後、連合赤軍内部のリンチ殺人事件も明らかになり、人心は超過激派から離れていった。吉野雅邦らのような良家出身の団塊世代の秀才たちが、なぜ、このような突き詰めた行動を展開することになったのか・・・。

ほぼ同世代の若者たちが引き起こした事件であるだけに、団塊世代の私たちは無関心ではありえず、この事件に関して、様々な機会によく議論した。

世間から完全に孤立したがゆえに、元々、理念も異なるふたつの組織の合体であるだけに、自らの内部の人間関係にも常態的に疑念を持ち、次は自分かもしれないという恐怖感に苛まれながら、やらねばやられるとばかりに、次々に仲間に総括を強い、自己批判させ、死に追いやっていったのだろうなどと、リンチ殺人事件を分析したりした。

彼らは、どこまで人民大衆の至福を考えていたのだろうか、彼らが万一、権力の座に就いたとしたら、どんな社会が現出したのだろうか、彼らの理想とする社会とは結局、どのような社会だったのだろうか等々にも議論は及んだ。

日本赤軍の幹部で長らく闘争の場をアラブ諸国に移していた元明治大学生の重信房子は、理想の社会が実現したら、子どもが好きだから幼稚園の先生になりたいと言っていたという（かつて彼女と接触があったという新左翼系の人物の話)。

けれども、その理想の社会というのは、どんなだったのだろうか。

大国間の都合による沖縄の施政権の返還

1972年5月には、沖縄の施政権が日本に返還された。日本の旧左翼も新左翼も保守陣営も沖縄の本土復帰を願っていた。しかし、明治新政府発足後、琉球処分というかたちで日本国に編入されたという意識を持つ沖縄の人々の心境は、本土の日本人の気持ちとは全く違うものだった。

2002年、沖縄本土復帰30周年記念が本土で喧伝されていた頃、ちょうど沖縄を訪れていた私は、現地のあまりに覚めた様子を目の当たりにし、改めて72年の沖縄の施政権の日本への返還に関して問うてみた。案の定、「あんなものはまやかしだった」といった見方の人が多かった。「意味ない」とまで言い切る人もいた。

太平洋戦争末期における沖縄の地上戦によって、老若男女を問わず多大な住民が犠牲になっ

た沖縄は、戦後、日本の独立後も、アメリカ合衆国によって統治され続け、土地を奪われ、米軍基地にされるという憂き目に遭ってきた。

沖縄では、そうした沖縄の人々の苦難を、本土の人々は見て見ぬふり、きちんと知ろうとしない、知らんぷりという見方に基づく不信感が根強く存在している。

であるから、沖縄独立論も根強い。今でも多くの沖縄の人々にとっては、自分たちは「ウチナンチュ」であり、本土の人間は「ヤマトンチュ」なのだ。ちなみに、移民研究の分野においても、「オキナワン」、「ジャパニーズ」と両者を区別して論ずる向きもある。

後日、移民研究との関連で沖縄を訪れる度毎に、学生時代の一時期、「沖縄を返せ、沖縄を返せ」「民族の怒りに燃ゆる島、沖縄よ」等と歌いながらデモ行進の隊列に加わった自らの単純素朴な思考を顧みざるを得なかった。

確かに、多くの米軍基地はそのまま温存され、植民地以下のような状態のままでの施政権の返還だったのだ。いまだに、その弊害は後を絶たない。

７年余の長期政権を誇った佐藤栄作は、この「沖縄返還」を花道として退陣し、田中角栄が後を襲った（72年７月）。

田中内閣発足直後、団塊世代を始め、若者たちに大きな影響をあたえることになる文化情報誌『ぴあ』が創刊され、圧倒的な支持を受けた。

文化風俗面で、1964年（昭和39）創刊の平凡パンチや1965年（昭和45）開始の11ＰＭ等とともに、団塊世代にとっては、忘れられないメディアとなる。

田中政権の下で、戦後長らく懸案となっていた日本と中国との国交正常化が漸く実現した。中国で、今でも田中や、当時の外相、大平正芳の評価が高いのは、まさにこの一件のゆえである。

ネス湖怪獣国際探検隊そして石油ショック

1973年２月、筑波大学設置法案が閣議決定、７月には自民党が参議院で、同法案を強行採決、９月には、筑波大学法が公布され、手回し良く、移転推進派だった元東京教育大学長の三輪知雄が筑波大学初代学長となり、11月には、筑波大学発足の運びとなった。

この間、移転に反対だった東京教育大学文学部教授会や広範な学生の意見はことごとく排除された。事態が最後の局面に近づいていた頃、家永三郎教授の研究室で、師と語らっていた時、大学正門付近から、「学内の学生諸君、我々の筑波移転反対闘争に、〇〇大学、△△大学、××大学から、大勢の同志が支援に駆けつけてくれたことを報告するとともに、ワレワレわあ、更なる闘争を・・・」という大音声が聞こえてきた。

移転反対闘争最後の盛り上がりだった。

ある種の挫折感に苛まれていた私は、偶然のきっかけで、ネス湖怪獣国際探検隊の一員となった。偶々とはいえ、しばし日本から離れたいという欲望の介在は明らかだった。

これは、「ネッシー」と称された未確認遊泳物体の正体を突き止めることを目的とした探検隊だった。隊員には、シカゴ大学準教授や水中写真家、ダイバー、冒険好きの作家や大学生に加えて、「火の玉勘十」こと加藤勘十と加藤シズエの娘とか某放送局のアナウンサー等がいた。チーフ・プロデューサーは呼び屋の康芳夫、総隊長は石原慎太郎という、革新、保守が混然と入り交じったお遊び探検隊だった。

私は、岡回りの聞き書き調査担当となり、ネス湖の周囲の村や町を巡って、フィールド・ワークを行った。明らかに現実からの逃避ではあったが、スコットランドという異郷の地における非日常性は、紛れもなく私の心を癒してくれた。

この隊は、日本の高度経済成長期の最後の小さなあだ花と言ってもいいような存在だった。ささやかな無駄遣いが許された探検隊だった。

私が、ちょうどロンドンに滞在していた頃、石油ショックが起きた。華麗な、きらびやかなはずのロンドン市街は、必要最小限の明かりを残して、暗かった。以後、日本でもネス湖探検隊のような無駄遣いはけっして許されなくなる。

イギリスで観るＢＢＣテレビのニュースには、日本で、主婦が洗剤やトイレット・ペーパーの買いだめに狂奔している姿が写し出された。日本における高度経済成長の最終的な終焉だった。

第２次、第３次と探検隊は、継続するはずだったが、もちろん、こんな遊びに寄付してくれる企業、個人等は皆無となり、あえなくネス湖怪獣国際探検隊は第１次のみで終った。　石油ショックという得体の知れない大きな怪物は出現したが、とうとうネス湖の怪獣は出現しなかった。

団塊っ子大学生たちの卒業・そして現実社会へ

1970年代初めの数年間のうちに、団塊っ子大学生たちは、次々に学窓を後にして、各々、それぞれに生産の現場等に活動の場を移していった。

多くは、３年生後半から４年生ともなると、人によっては心ならずも、人によっては至極、当然の事として現実と妥協して、企業の就職試験や公務員試験、教員試験等を受けたりして、生きる糧を得るための場を確保する努力を始めた。

そうしたなかで、大学院進学希望や教員志望の学生たちのうちには、先に触れた研究職のＣさんや高校教員Ｆさんのように、企業社会には取り込まれたくないという意識を宿す人も少なくはなかった。

もちろん、団塊っ子大学生のなかにも、さっと転身する学生も多かったし、もともと大学をステップ・アップの場とのみ捉えている学生もいた。そういう一群が一番、悩みもなく、傷つくこともなかったようだった。

ごく僅かな人々が、あくまで現実との妥協を潔しとせず、人知れず苦難の道を歩むことになる。「あいつは地下に潜ったらしい」などと噂された人物もいた。こうした元同級生、元同窓生等とは連絡が取れなくなってしまっている場合が多く、自ら生を断ってしまった人もいた。

団塊っ子大学生たちの卒業とともに、キャンパスは急激に静かになり、高度経済成長期を終えた日本社会もまた静かになっていった。

社会人としての団塊世代・そして「ニューファミリー」　彩り豊かな世相のなかで、団塊っ子大学生たちの多彩な人間模様がキャンパス内外に展開した1960年代末期から70年代初めだった。

この頃までは、多彩ながらも、なにがしかの共通項をもって語ることの出来た団塊世代も、以降は、生産年齢となり、それぞれの持ち場で、それぞれの人生を歩むことになる。

今度は、それまでとは逆に、あまり多彩とは言えなくなるが、共通項で括ることは難しくなる。各々の団塊世代が、生産の場で、家庭で、それぞれなりに地道に自分の生きていくのだ。したがって、以降の団塊世代の生産年齢においては、この世代を一つの塊として論ずることに格別の意義を見出すことはできないのである。

マスコミの喧伝等におもねって、「ニューファミリー」などと称して団塊世代を恣意的に一括りにすることは不可能ではないが、それに格別に大きな歴史的意味を付与することはできないと言わざるを得ない。が、これに関して一言だけ付言しておこう。

団塊世代にあっては、それ以前は主流だった、「お見合い結婚」に代わって「恋愛結婚」が盛んになったと言われる。キャンパスで知り合った同級生同士が結婚する「友だち夫婦」が数多く誕生したことも事実だ。

それが、夫婦や家族のあり方を変える力になったことも確かである。見合いでは、男の方が３，４歳年上が望まれていたが、恋愛では、ほぼ同年輩が多くなる。それに伴って、日本では戦後も、儒教的社会規範のもと、男性主導の「家族」運営が一般的だったのが、「家庭」の運営に関して女性の力が強まった等々の変化があったことは否めない。

畢竟するに、「ニューファミリー」とは、換言するなら、核家族化が進行し、「友だち夫婦」が増えるなかで出来（しゅったい）した「大いに女権が拡張されたファミリー」と言えよう。

奇しくも、団塊世代からは、女性学の第一人者にして、女権拡張論者の上野千鶴子東大教授が輩出している。

ともあれ、「ニューファミリー」云々は、家族史や家族社会学の主要テーマとはなりえても、団塊世代論や同時代史としての団塊世代を論ずる際の重要テーマとはなりえない。

歴史的に、再度、この世代を一塊りとして論ずる必要性の出来（しゅったい）は、彼らが定年を迎える時期まで待たなければならないので

ある。

生産年齢から定年、そして定年後へ　団塊世代が生産の中核にある頃には、男女雇用機会均等法も公布（1985年）されている。これは、ザル法といわれながらも、男女平等に向けての一里塚となった。団塊女性で、この恩恵に預かっている人は少なくない。

身近なところで団塊女性を見渡してみても、専門職を得、精力的に働き、仕事でも家庭でもイニシャティブを取っているような闊達な女性が多い。

それでいて、それぞれにエッセイ、水彩画、油絵、水墨画、フルート、ハープ、バイオリン、フラダンス、フラメンコ等々と、余裕をもって趣味に打ち興じている。

定年後は、団塊女性の方が、仕事一筋だった団塊男性よりも、ずっと華やかで楽しそうであろう事が予測できようというものである。

先の聞き書き調査の結果を見ても、大学卒業後に関する団塊世代（殊に男性）の自画像は、学生時代までのそれに比べて生彩を欠くきらいなしとしない。先述のような作家Ｂ氏の「団塊世代は大学闘争までで終わり・・・」と言う発言が現実味を帯びてくるのだ。

それぞれに何らかの意味で生産の場に属し、時折、斜に構えて「事志に反して企業社会の論理に取り込まれてしまった」などと嘆息するものの（こんな嘆息とは無縁の団塊世代も、もちろん多いが）、けっこう懸命に働き、それぞれに結婚し、人の子の親となり、やがて激しい競争に打ち勝って中間管理職になり（もちろん、そうはならなかった人もいるが）、その立場上、上下の板挟みになって辛酸を舐め尽くし、忙しい毎日のなかに埋没して、持病の一つ、二つも抱えながら、あれこれ、そうこうしているうちに、あっという間に定年年齢に達したという感想を漏らす団塊男性が多かったのである。

団塊世代は「三つわ世代」あるいは「３Ｗ世代」か？　中堅企業で部長を務める団塊世代のＹさん（男、1948年生）は、手短に自らの半生を総括してくれた。「結局、俺の人生って、すべての面で中途半端だったような気がする。大学紛争への関わりもそうだった（「紛争」という称し方に既に彼の大学闘争へのスタンスが露呈している）。就職も一流企業には行けず、極端に貧しくはなかったけど、さほど裕福でもなく、結婚して、子どもも二人できたけど、女房との人間関係（主として性生活）も満足と言うには程遠かったしな。今や、完全なセックスレスだよ。バブル経済期（1980年代半ばから90年代初頭まで）に旨味を味わうこともなく、むしろ、その割を食って、高いローン金利で、高いマンションを買わされて、返済も済まないうちに定年だよ。そしたら今度は２００７年問題とかいって問題児扱いだしなあ。割の合わない侘びしい人生だったような気がしないでもないよ」。

このＹさんの発言に触発されて、私は団塊世代を、「三つわ世代」あるいは「３Ｗ世代」と命名した。３つの「Ｗ（わ）」すなわち、「割の合わない、分かってもらえない、侘びしい世代」である。これは、団塊世代全体をカバーするものではないが、殊に団塊男性の一部にはものの見事に当てはまる呼称かもしれない。

先にも登場してもらった高校教師の団塊世代のＦさん（女、1949年生）は言う。

「団塊の老後は、男より女の方がずうーっと充実してるわよ。趣味もちゃんと以前からやってるし（ちなみに、Ｆさんは書道、ギター、油絵が得意）、女の方がおしゃべりする友だち、一緒に旅行する仲間も多いし、色々と助け合えるしね。女の方が、しなやかな生き方が出来るんじゃないかしら」。

ちなみに、団塊男性で老後は「夫婦でいっしょに暮らしたい」と望んでいる人は94.9％に上るのに対し、団塊女性では85.3％に止まる。団塊男性では、61.9％が老後も「収入を伴う仕事がしたい」と考えているのに、団塊女性では、その志向は40％を下回る（2003年、東京ガス都市生活研究所と住宅生産団体連合会の共同調査、質問紙郵送法、団塊世代363人＝ただし、ここでは1946年～1950年生まれを団塊世代としている）。

こうしてみると、団塊男性の老後は、家庭生活では妻に頼る傾向が顕著で、相変わらずあくせくしていて、老後を悠々自適で過ごすという

ふうではなく、何となく中途半端な灰色の老後になりかねない気配なきにしもあらず。対して団塊女性の老後は、何となく生気がみなぎったバラ色の老後になりそうな気配が濃厚なのである。

団塊男性は、よりよい老後のために、早めの意識改革が必要かも知れない。

［4］日本人の頑張り・団塊世代の頑張り

1．周縁国家ゆえに頑張る日本人

周縁としての日本・中心としての中国や西欧諸国他　日本は有史以来、政治的にも、経済的にも、文化的にも周縁的な存在であり続けた。それゆえに常に、その時々における日本にとっての政治的、経済的、文化的な中心的存在を志向し続けてきた。

すなわち、周縁としての日本は、その折り、その折りの中心から、諸々の文化文明を摂取し、その中心に追いつけ追い越せとばかりに頑張り続けてきたのである。

その流れを鳥瞰しておこう。原始古代においては、日本は世界に冠たる中国文明を誇った古代中国王朝である漢、隋、唐等から、文字、宗教、法制、都城、その他、ありとあらゆる面での文化を摂取し、自らの文化的力量を高めていった。

中世に至っても然り、為政者たちは、中国との交易を独占し、富を蓄えるとともに、自らの文化的優位を確立していった。古代最末期、大輪田泊のを拠点として対宋貿易に力を入れた平清盛然り、対明勘合貿易を推進した室町幕府第三代将軍足利義満然り。

中世末、十六世紀半ばになると、南蛮諸国が、忽然として日本にとっての中心的存在となる。1543年（天文12)、ポルトガル船が種子島に鉄砲をもたらしたのが、その嚆矢といえよう。

時あたかも戦国時代の真っ只中というタイミングもあり、鉄砲は燎原の火の如く広まっていった。その後、新しい物好きな織田信長や豊臣秀吉が天下人となり、南蛮人を優遇し、南蛮文化摂取に大いなる関心を示した事は周知の通りである。

近世に入って、徳川政権下、長らく日本は鎖国をする事になる。その間の日本にとって、どん欲に文物や知識を吸収すべき中心的存在の国は消失する。それでも、オランダ、清、朝鮮王朝、琉球王国との細々とした交流は続いた。

二百数十年に渡って日本が鎖国をしている間に、西欧諸国は産業革命、ブルジョワ民主主義革命を成し遂げ、強大な近代国民国家を作り上げ、資本主義的な生産様式を確立させていた。

であるから、幕末における開国、そして明治維新以降の周縁国家日本には、既に近代化を成し遂げた西欧諸国という、とてつもなく大きな中心的存在が姿を現す事になる。

以後、近代日本にとっての中心的存在は、西欧諸国となる。西欧に追いつき追い越せと、ひたすら頑張って、日本は近代化にこれ努める。その結果、多くの歪みを生じながらも、日本は非西欧諸国の中では、唯一、スムーズに近代化に成功する。

これも、日本が常に周縁文化の国であり続け、折々の中心を志向して、その文化を高めてきたという歴史的伝統のゆえといえよう。

○○化の連続としての日本の歴史　果たせるかな、日本よりよほど早く近代西欧文明に接していたインドや中国は、かつて自らが世界に冠たる文化文明を築き上げた経験があり、その実績と誇りは西欧文明何するものぞといった矜持を彼らの心中にもたらし、易々と西欧近代の果実を吸い取って近代化を成し遂げる事を潔しとはしないというような意識を形成していた（それこそ、自らこそが世界の中心であるといった中華思想といえよう)。

そうした意識が、インドや中国が、西欧流の近代化に乗り遅れる内在的条件の一つとなった事は明らかである。

もちろん、それにはイギリスの植民地政策等々の外在的条件も、複雑に絡み合っていた事は言うまでもない。

ともあれ日本は周縁であったが故に、常に中心の文化文明を摂取する事が習い性となっていたからこそ、物質的な面においてのみではあったが、割合に手際よく近代化に成功したのだった。

このように、日本は原始古代から近代に至るまで、常に周縁的存在として中心的存在の国を志向して、頑張ってその文化文明を摂取し、、自らの文化文明を高めてきた。

その経緯を私は、日本の常なる〇〇化の歴史として捉えている。すなわち、原始古代においては中国化（チャイナイゼイション）、中世においても中国化、中世末における南蛮化（ナンバニゼイション）、そして近代における西欧化（ウェスタナイゼイション）である（この辺りに関して詳しくは拙著『「頑張り」の構造～日本人の行動原理』[1987、吉川弘文館]、『日本人と国際化』[1989、同前]、『日本人はなぜ頑張るのか～その歴史・民族性・人間関係～』[2004、第三書館] 等を参照されたい）。

この〇〇化の歴史は、現代史にも受け継がれる。すなわち第二次世界大戦敗戦後の周縁国家日本は、新たな中心的存在、アメリカ合衆国を見習って（あるいは、見習わされて）アメリカ化（アメリカナイゼイション）の道をまっしぐらに歩むことになるのだ。

高度経済成長と団塊世代　巷間ではよく団塊世代は、高度経済成長の戦略的、頭脳的な担い手として、中核として頑張ったというような評価がなされる。

例えば今日的な用語に関するオピニオン・リーダー的存在の一、『イミダス』にしてからが、「日本の高度成長を担ってきた『団塊の世代』…」（2006、集英社）といった記述をしているのだ。同様の『現代用語の基礎知識』にも団塊世代に関して「…戦後日本の高度成長を支える貴重な労働力…企業戦士としてモーレツに闘い…」（2006、自由国民社）などという記述が見られるのである。

「…団塊世代の男性たちは、戦後の復興から高度成長期をつくりあげた『企業戦士』に続き、高度成長期から安定成長の達成を『会社人間』として支えてきた。会社への思い入れは、団塊以降の世代に比べて強く、家庭や地域、『個』としての生活は二の次だった」（松島悦子「『会社人間』の自立は、『個』としてのネットワークづくりから」、2004、前掲東京ガス調査に基づくレポート）云々といった叙述もよく目に付くところである。

より直接的に、団塊世代は「…競争心と日本的仲間意識や集団行動を編み出し（た）…日本経済高度成長のエンジン」（森真「市長からの手紙」[『広報かかみがはら』2006. 1. 15] だったと述べるような論も少なくない。

けれども、こうした叙述は、先にも触れたように、そしてM氏らも述べているように俗説に過ぎない。決して事実ではないのである。

団塊世代が、社会人として高度経済成長の巷に躍り出たのは、中卒の団塊世代なら、1963, 64, 65年頃、高卒の団塊世代なら、66, 67, 68年頃である。すなわち、中卒団塊、高卒団塊の人々が、それぞれ学校を出て、就職した頃は確かに高度経済成長華やかなりし頃ではあった。

しかし、彼ら、殊に中卒団塊の人々は、最底辺労働力として、高度経済成長に大いに貢献した存在ではあっても、戦略的、頭脳的な担い手だの、中核だのというような存在ではありえなかった。高卒団塊の人々にしても、中卒よりは恵まれていたにしても、中核的存在などではありえなかった。

もちろん、中卒団塊、高卒団塊の人々のなかにあって、高度経済成長の戦略的、頭脳的な担い手になっていった数少ない例外的存在はあるだろうけれども。

そうして、大卒の団塊世代だと、1970, 71, 72年頃、大学を出て就職していったわけだが、既に、この頃は高度経済成長期の最末期である。その頃に、新たに職場に参入したばかりの新人社員が、企業の技術革新、拡大再生産、事業拡張、広報戦略等に関する頭脳的な担い手、まして中核などにはなりようがないことは明らかである。

つまるところ、中卒団塊であれ、高卒団塊であれ、大卒団塊であれ、当時は昨今以上に、日本社会がまだまだ強固な学歴社会であったこと、まだまだ年功序列を重視する社会であったことに鑑みるならば、高度経済成長の中核的な担い手などではありえなかったことは、明々白々なのである。

敢えて言うなら、中高卒の団塊世代が高度経

済成長を底支えしたということだ。

このことを、ここで再確認しておこう。歴史を構築するなかでは、俗説は排されなければならないから。とともに、なぜ、そのような俗説が跋扈していたかを検証することも必要ではあろう。

「団塊世代が『会社人間』として、高度経済成長の担い手であった」という俗説の因って来るところは、この世代が多数であり、いつも多数であるがゆえに注目され、揶揄され、ステレオタイプ的に規定されてきたところに存する。

団塊世代は、「空前絶後の多数で、すし詰め教室、受験競争社会のなかを生き抜いた、頑張ることや集団主義的行動を得意とする、大学闘争世代」といったステレオタイプ化されたイメージが一人歩きしているうちに、ついには、彼らの少年期後期から青年期前期と期を同じくする高度経済成長期の担い手にまで擬せられてしまったのではないだろうか。

2.「団塊世代」再考

「団塊世代」と言われたくない団塊世代　プロローグで、拙稿の新聞コラムを提示して、団塊世代を「団塊世代」と一括りにして捉えないで欲しいと述べた（と言いながら団塊世代論を展開するのは、一見、矛盾した言動のように思われるかもしれないが、そうではないことも先述の通りである）。

実は、これは一人、私のみの見解ではなく、多くの団塊世代に共通する意識でもある。団塊世代に属する人に、「あなたは『典型的な団塊世代の人』と言われたらどんな感じ・・・？」と発問すると「うれしい」という返答は僅かに9.1％、「どちらともいえない」が65.3％、「うれしくない」が25.5％という結果が出ているのだ（豊田裕貴「典型的団塊イメージを『リセット』」2004、先の東京ガス都市生活研究所調査より）。

団塊世代の自己イメージは「責任感のある」51％、「まじめな」64.5％、「分別のある」34.4％、「親しみやすい」34.7パーセント、「好奇心旺盛な」33.1％等々、自己肯定的なものが多い（同上調査）。

しかし、他世代からは必ずしも、そのように好意的には見られていないことは、先の私の調査結果からも明らかなのである。他世代から、必ずしも好意的に見られているわけではなく、しかも、その見られ方がステレオタイプ的に、一括りにされてしまったようなものだったとしたら、団塊世代が「団塊世代」と呼ばれることに抵抗を感じるのは至極、当然といえよう。

団塊世代が、他世代からあまり良いイメージをもっては見られていないことの原因は、個々の他世代の個人的な付き合いや体験に基づくこともあろう。個々の団塊世代の性向によることもあろう。しかし、それらとともに、団塊世代のイメージを悪くしている原因は、次のような識者たちの「団塊世代」評によるところも大きいのではないだろうか。

堺屋・宮台・市川らの「団塊世代」評　「団塊の世代」の名付け親である堺屋太一は、団塊世代は「従順」で、「団塊の親たち、団塊の兄姉たちが作った戦後のコンセプトに対して非常に忠実で、疑問も持たない。団塊の兄姉たちは安保騒動の時に『岸内閣を倒せ』と叫んで体制変更の議論をした・・・。団塊の学園紛争では・・・『学園のここが悪い』とかで、『佐藤内閣を倒せ』と言ったやつはいない・・・。全体の大きな体制に対しては極めて従順な世代。みんなが塊として行動した・・・」云々と決めつける（堺屋太一他「段階世代の老年格差社会」[『中央公論』、2005年11月号]）。

名付け親にして、このような事実誤認も甚だしいいい加減な「団塊の世代」評を公言するのである。こうした無責任な発言によって、団塊世代と他世代とのギャップが増幅する弊害は計り知れない

社会学者の宮台真司は、団塊世代は「いまだに、日の丸に一体化する輩が右で、赤色旗に一体化する輩が左だ、といった稚拙な認識のまま。・・・右も左も、国家だ、党だ、と大いなるものに寄りすがる腰抜けばかり。既成図式に寄りかかって思考停止に陥る輩しかいない。・・・利他のフリをしたエゴイスト・・・ノリだけ・・・」云々（宮台ブログより）と、言いたい放題、団

塊世代をコケにする。

よほど彼の交友範囲内の団塊世代の人々に、そのような人物が多かったのだろうか。それにしても、学者とも思えない、それこそ思考を停止させたような客観性に欠ける、こうした指摘には、まともに反論するのも時間の無駄というものだろう。

とは言え、こうした俗説が一人歩きをして、他世代の団塊世代イメージ形成に関与する可能性は皆無ではない。とすると、これは徒に世代間の不信感を増幅させ、世代間対立を煽る俗悪な俗説といえよう。これだけ指摘しておけば充分であろう。

市川孝一文教大学教授は、団塊世代は「別名、『全共闘世代』とも呼ばれ、その後成長する過程の節々で何かと問題を引き起こすことになる世代でもある」（市川「戦後生活史と日本人の生活意識の変容」[『現代のエスプリ』341号、1995年12月、至文堂]）と言う。

何を根拠に、団塊世代は折々「何かと問題を引き起こす」などと言うのだろうか。団塊世代の人々からすると、名誉毀損で訴えたくなるようなふざけた規定といえよう。

ともかく団塊世代は何故か悪く言われがちな因果な世代なのだ。

団塊世代は「極端な経済主義者」などではありえない　さらには、団塊世代の極めて可視性の高い人物のなかにも、「誤った」と言って言い過ぎなら、「偏った」自己の団塊世代イメージを広く世間に広めてしまっている人もいる。

寺島実郎日本総合研究所会長などに、その典型をみることができる。彼は、団塊世代を、「極端な経済主義者にして、私生活主義者であり、よりよい生活を希求するという一点において価値観の一致を見出すことができる世代」というように規定する（寺島『われら戦後世代の「坂の上の雲」』[2006、ＰＨＰ研究所]、初出は『中央公論』1980年5月号。後、寺島『団塊の世代わが責任と使命』所収〔1999、PHP研究所〕）。

彼自身の志向がそうであり、彼の周辺の団塊世代経済人がそういう志向を有しているのであろう。しかし、これが、団塊世代などと言い募られては、多くの団塊世代は戸惑いと不満とを隠せまい。

こうした団塊世代の規定、イメージが前面にでているからこそ、団塊世代の人で、「典型的な団塊世代」と言われたらうれしいという人は、9.1％に止まるのである。

「極端な経済主義差者」は、寺島自身やその周辺であったとしても、団塊世代の多くは、良きに付け悪しきに付け、むしろ非「経済主義者」だったのだ。一つ例を示しておこう。

団塊世代は退職後の資産計画をどう考えているかを知るための全国調査の結果、「必要な生活資金の半分も確保するメドが立っていない人が50％以上」、「『退職後のための資産運用を何もしていない』との回答が3人に2人」（2006年、フィデリティ投信調査、朝日新聞、2006年9月12日付夕刊）だったのである。

この一例を取り上げて見るだけでも、団塊世代が「極端な経済主義者」などでは全くありえないことは明らかなのである。

団塊世代は遮二無二「頑張る」世代だったのか

松島や寺島のような偏った個人的な団塊世代の規定やイメージが、巷間、一人歩きしてしまったためであろうか。団塊世代は、日本株式会社に忠誠を誓う「会社人間」として、家庭生活を犠牲にして、「経済効率万能主義」の信奉者として、会社のために身を粉にして「頑張った」というような伝説めいた話が世間に流布している。

果たして、実際にそうだったのだろうか。これは、先に俗説として退けた、団塊世代が高度経済成長の担い手だったという説と表裏一体をなす説と言えよう。

1960年代末、すなわち長く続いた高度経済成長が漸く終わりに近付こうとしていた頃、あたかも高度成長を一日でも長く継続させようと意図したかのように、かのモーレツ特訓が各会社で流行した。その所産が「モーレツ社員」である。

この風潮に乗って、1969年（昭和45）、松尾ジーナを起用した丸善石油のＣＭ、「オー、モーレツ」が大ヒットした。時は、まだ大学闘争の真っ最中だった。団塊世代は、闘争の中核として、あるいはセクトに属し、あるいはノン

セクト・ラディカルとして活動し、あるいはノンポリとして肩身の狭い思いをするなり、闘争など、どこ吹く風と知らぬ顔の半兵衛を決め込んでいた時期である。

学窓のなかでそれぞれに呻吟していた、まだ大卒にもなっていない団塊世代が、「モーレツ社員」になれるわけがなかった。中卒の団塊世代、高卒の団塊世代は既に社会人になってはいたが、その大多数は、「モーレツ社員」に擬せられるような立場になかったことは先述の通りである。

企業戦士、モーレツ社員と揶揄されながら、高度経済成長のために、ひたすら頑張っていたのは、実は団塊世代より上の世代だったのである。会社の上下関係のなかで、このプレ団塊世代が、高度成長の火を消すまいとして、その最後の局面で、団塊世代を叱咤激励、頑張らせたという構図は存在していたかも知れない。

日本人の「頑張り」　私は、「頑張り」を、日本人のコア・パーソナリティーとして捉えている。さまざまな局面で、善し悪しは別として「頑張る」ことは、日本人の特徴的な民族性の一であると考えている。

この際の「頑張る」とは、「短期的、集中的に、ある一つのことがらに精力を傾注すること」といったほどの意味合いである。

世界各地における日本人移民や日系人の言動を分析すると、「頑張る」ことによって、自らの「日本人としてのアイデンティティ」を確立していることが明確に見えてくる。

詳しくは、前掲拙著『「頑張り」の構造』等に譲るが、私は、日本人が外来種であるイネを日本に根付かせ、それを主食とするために、水田稲作農耕を主たる生業としたことを淵源として、日本人は「頑張る」性向を有するようになっていったと考えている。

その後も、先に述べたように、周縁国家日本は、常にその折々の日本にとっての中心的存在から、自分たちよりずっと高度に発達した文化文明を吸収しようと懸命な努力を続けた。これを私は、中心的存在（○○）を志向しての周縁国家日本の○○化の連続の歴史と称するのである。

これは、日本史において、原始古代から近現代に至るまでをほぼ貫徹している歴史的事実といえよう。例外と言えば、古代、菅原道真の建言により遣唐使船が中止になった一時期と、近世、日本が鎖国をしていた一時期くらいなのだ。

この歴史的に継続した事実が、「頑張る」日本人の性向を醸成し、固化していった。したがって、「頑張る」性向は、ひとり団塊世代の人々の属性などではありえず、広く日本人全般にみられる性向として捉えられるべきものといえよう。

団塊世代が提起した「頑張らない」　むしろ、団塊の世代に至って、「頑張りすぎる」ことの弊害が指摘され、「頑張らない」ことに意義を見出そうとするような主張が出てくるようになってきたのだ。

「・・・『頑張り』過ぎると視野が狭くなり、他者の存在ばかりか自己をも見失うことになる。・・・混迷の時代、国家も個人もこれまでのように遮二無二頑張ってさえいれば良い時代ではなくなった。自らのために「我ヲ張ル」時代は終わり、他者のために何ができるかを考える（べき）時期を我々は迎えている。・・・」（拙稿「『頑張る日本人』見つめ直す時～国家も個人も他者に何ができるか考えたい～」、1995年6月2日付、朝日新聞夕刊）。

こうした団塊世代の論調は、世間の反響を呼び、この論などは翌年の複数の大学入試の国語問題などにまで登場している。バブル経済期終焉の頃には、団塊世代主導のもと、こうした「頑張らない」論が展開されているのである。

このような考えの延長線上に、鎌田實諏訪中央病院長の好著『がんばらない』（2000年、集英社）を捉えることもできよう。鎌田医師も又「頑張りすぎず」、世間的な栄達、経済的な豊かさを敢えて拒絶する道を選んだ団塊世代の一人なのだ。

多くの団塊世代は「食い逃げ世代」などではありえない　日本中がバブルに踊り狂った一時期、大卒の団塊世代は、各方面でそろそろ中核的な役割を果たすべき立場に位置し始めていた。その意味で、日本の経済運営を誤ったことに関して団塊世代のごく一部は、責任の一端を

負うことを回避すべきではないだろう。

しかし、寺島実郎が自らを卑しめて言うような、後に続く世代から「我々は『食い逃げ世代』とか言われ始めている」（寺島前掲書）などといった謂われのない非難には、敢然と立ち向かうか、無視するかのどちらかしかあるまい。

寺島ら、数少ない経済界における可視的な団塊世代、地位や金に恵まれた団塊世代、権力に近いところにあった団塊世代等はいざ知らず、多くの声なき団塊世代は、さほど他世代と変わることなく、先に触れたようなYさんに一つの典型を見るように、「まじめ」に、それなりの「責任感」をもって、地道に、バブルの恩恵などに浴することもなく平凡な後半生を送ったのだ。「食い逃げ」などというさもしいことは、したくてもできなかったのが大多数の団塊世代だったのである。

バブルを主導したり、その恩恵に預かった、ごく一部の団塊世代の人々のために、団塊世代全体が「食い逃げ世代」などと称されるような誤謬は、到底、首肯できるものではない。

もし、団塊世代＝「食い逃げ世代」と考えている団塊以降の世代の人々がいるとしたら、この際、そのような誤った見方は是非とも改めていただきたい。それは、自らが、そうした「やましさ」を有するごく一部の可視性の高い団塊世代の一人の個人的見解に過ぎないからである。

3．団塊世代を取り巻く現代の環境

ビジネス・チャンスとしての団塊世代　団塊世代が高齢化し、定年に至るという時期にあって、団塊世代は露骨なまでにビジネスの標的となった。

何しろ、1947年生まれが267万9千人、48年生まれが268万2千人、49年生まれが269万7千人で、総計805万8千人の多数に上るのであるから、この世代の消費動向、需要にビジネスの観点から関心が集まっても無理はない。

まして、その多数が順次、定年を迎え、従前より自由な消費行動や投資行動に向かうとすれば、経済界が、バラエティに富んだ商品を取り揃えて、手ぐすねを引いて待つのは至極、当然のことである。資本主義の論理にも合致する。

定年後、団塊世代は、田舎に居を構えて、自給自足程度の農業に従事したいらしいとなると、過疎に悩む地域の地方公共団体までが彼らの誘致に乗り出す。

定年後、団塊世代は、都心の便利な場所に回帰する志向を持っているらしいとなると、建築業者、開発業者は、団塊世代の住居に関する好みの市場調査を始める。

定年で、団塊世代が手にする50兆円近くの退職金を虎視眈々と凝視する金融機関、銀行、証券会社、生命保険会社等は、団塊世代にターゲットを絞った資産運用のための新商品を続々、発表する。

定年後は、夫婦でのんびり旅行したいと考えている団塊男性や、年をとったら夫ではなく親しい気の合う同性と旅をしたいと考えている団塊女性向けに、その望む旅のかたちの研究に余念のない旅行業界。さらには、海外各地でのロングステイや海外移住までも商品化しようという動きもある。

団塊女性は、その上の世代の女性たちよりお洒落と喧伝して、時間と金のある彼女たちに擦り寄るファッション業界や、化粧品業界。

団塊世代は他世代との付き合いが下手で、自分たちだけで群れたがるといった俗説のせいだろうか、団塊世代を狙った同窓会関連ビジネスも盛んになっている。

団塊世代が、一層、高齢化する近未来に、大いなる需要の増大が見込めるであろう事を心密かに期待している「おむつ」業界、介護業界。

このように様々な業界が団塊世代を取り込もうと触手を伸ばしている。具体的な商品の列挙には枚挙に暇がないほどである（このような事実に関しては、朝日、読売、毎日、日経、中日、岐阜、東京等の各紙記事および前述の聞き書き調査による）。

2007年問題としての団塊世代　単純に言い切ると、2007年問題とは、団塊世代最初の1947年生まれが2007年に60歳に達し、定年退職し、以降、年々、団塊世代が定年を迎えて、

社会の中核から離れていくことに伴って発生する諸問題である。

まずは、世代間の格差を生じかねないとして、危惧されている年金問題である。ここで、問題なのは、団塊世代が時に「年金泥棒」のように他の世代（わけてもより若い世代）から思われていることであろう。これも数の多さゆえの問題だが、それを団塊世代の責任に帰するわけにはいくまい。先の前編で取り上げた大学生Cさんの言ではないが、これは団塊世代の責任ではなく、政治の貧困ゆえに生じた問題なのだ。

これに関連して、そろそろ団塊世代を支える立場に立つべきはずの団塊ジュニアの動向にも目が注がれる。その団塊ジュニアに、フリーター、ニート、パラサイト・シングルが多いことに関しても、それは団塊世代の家庭教育に問題があったからだといった団塊バッシングが湧き起こる。

団塊世代の教育観と団塊ジュニアの志向との相関関係はきちんと研究されるべきであろう。しかし、社会の大きな状況を踏まえずして、フリーターやニートの出現に関して、情緒的に団塊世代の責任に置換するのでは事態の解決には繋がるまい。

むしろ、「・・・団塊の世代は、90年代に自らの既得権を守るために後続の若い世代の雇用市場への参入を阻害し、85万人にもおよぶニートや200万人を超すフリーターを生んできた」（嶋津隆文「大都市団塊85万人の”漂流”が始まる」［前掲『中央公論』同年同月号］）というような構造的な問題として認識する方が、問題の解決に向けては有効であろう。私は、その事実に関わる責任の一端は団塊世代にあるにせよ、より大きな責任は、これまた政治の貧困に帰すると考えている。

こうした事実は、世代間戦争の導火線になりかねない。引火し、爆発しないうちに、早急に政治がリーダーシップを発揮し、財界や学界とも協力しながら、何人（なんぴと）たりとも真面目に働けば何とか生活しうるだけの賃金を得ることが出来る雇用、労働環境を創出すること、フリーター、ニート、パラサイト・シングルの真の原因や志向を突き止めること、世代間の不公平感を減殺させ、実際に不公平をなくすこと、特に、どの世代も老後の生活に必要かつ十分な年金を受給できる体制を構築すること、異世代間における共感的相互理解促進の方途を探ること等々の政策実現を心がけることを期待したい。

こうしてみると、日本における2007年問題は、団塊世代の大量退職を触媒として生起した問題であることは間違いないが、結局は、ドイツなどで先行して見られるような、より大きな「ゲネラツィオン・グリッフェ（世代間のギャップ）」の問題として捉えられよう。

エピローグ
～団塊世代のこれからへ～

団塊世代の大量退職は、日本における前代未聞の事象である。そのせいであろう。新聞各紙や各総合雑誌等々の紙面には、「団塊世代」の文字が毎日、毎週、毎月のように出現する。

朝日新聞は「団塊はいま」「『団塊』の今」「団塊のあした」「『団塊』七百万人流」、読売新聞は「団塊インパクト」「新団塊ライフ～識者に聞く」「豊かさ再発見～第1部・新団塊ライフ」、毎日新聞は「団塊は眠らない」、岐阜新聞は「団塊再始動」などと題する長期連載等を通して、団塊世代の動向を注視し続ける。それだけ、世間の注目度も高いということだろう。

各紙の特集連載記事の多くは、様々な団塊世代の姿を客観的に描くといったスタイルを貫いている。「記事」と「論説」の違いと言ってしまえばそれまでだが、そこには、往々にして世の「団塊世代」論者にみられるような押しつけがましさは見られない。

むしろ、穏やかに、個々の団塊世代の人々に、「こんな生き方をしている人もいますよ」と囁きかけてくれているような心地よさがある。

対して、これまでに取り上げてきたように、可視性の高い堺屋太一や寺島実郎らを始めとする「団塊世代」論者の論調には、客観性に欠け、自らの狭い体験を基にした見解を臆面もなく提示しているような代物も少なくない。

そんななかで以下に、団塊世代に関する、や

や気になる一つの指摘を取り上げ、論じて締めとしよう。

東京都理事の嶋津隆文は、「・・・団塊世代は、次世代にうざったく思われているだけでなく、すでに大量人数をバックにした『強者』から、後ろめたさを持つ『弱者』に移行しつつある・・・」（前掲嶋津論文『中央公論』）と述べる。これは、彼の個人的な感懐ではあろうけれども、これから年老いていく団塊世代の人々にとって、もって銘すべき言葉とも言えよう。

寺島や嶋津のような団塊世代（論）に関してオピニオン・リーダー的な立場にある。自らも団塊世代の一員である識者たちが、自らの世代を「経済主義者」「私生活主義者」「食い逃げ世代」「後ろめたさを持つ『弱者』」等々と認識している（あるいは、他世代から、そのように思われていると認識している）こと自体も、逆説的だが、団塊世代の「３つわ」ないし「３W」（割の合わなさ、侘びしさ、［他世代に］分かってもらえないこと）を形成する一因となっているのかもしれない。

団塊世代にとって、自己批判、自己否定は、お手のものであるだけに、こうした論も受容し易いのかもしれず、そうした外在的認識によって、内在的な「３つわ」意識が増強されたとも考えられよう。

先にも触れたように、多くの団塊世代は、「食い逃げ」できるほどに恵まれた現役生活を享受できたわけでも、経済に異様なまでの価値を置くほどの銭ゲバでもなかったのだ。

したがって、「後ろめたさ」を感じる必然性はないけれども、しかし、今後は社会的「弱者」になるという自覚は必要になってこよう。

長い労働一辺倒の生活から解放された団塊世代には、他世代の引退時には見られなかったような様々な声が届く。やれボランティアに励めだの、やれ蓄積した知識や経験を他世代のために生かせだの、やれ官と民との間のパブリックとしての役割を担えだの、やれ活発に消費行動をせよだの、やれ新しい老年文化を創れだの、何のかのと夥しい干渉がましい言辞が寄せられるのだ。

たとえ好意的な発言であるにせよ、定年後の生き方まで、他人からとやかく言われたくはないというのが、聞き書き調査に応じてくれた団塊世代の人々に、ほぼ共通する見解だった。

ここでも、「団塊世代」を一括りにして捉える傾向が顕著に見受けられる。

「団塊世代」と一括りにして呼び掛けられても、「団塊世代」にも他世代同様、いろいろな人間がいるのだ。

またしても、プロローグに戻るが、多数が一時期に生まれ出たというだけで全てを一塊のように捉えて、一括りにして「『団塊の世代』って、言うな！」という所以である。一括りにされて、「ああせい、こうせい」と言われても戸惑うばかり、「大きなお世話」なのである。

取り敢えずは、ダグラス・マッカーサーではないが、定年を期に「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」とさせてほしい。

・・・しかる後に、即座に経験を生かして再就職するもよし、ゆっくり充電し直し、じっくり考えたうえで、何らか次の行動に打って出るもよし、政界へ身を置こうと企むもよし、起業を企てるもよし、ボランティア活動に専念するもよし、ふらりと旅に出るもよし、趣味の盆栽いじりに生きるもよし、絵筆を握り直すもよし、バンドを再結成するもよし、孫の専任家庭教師になるもよし、すっかり隠棲して好々爺になるもよし、長屋はないかもしれないが、コミュニティーのご意見番になるもよし、・・・。

団塊世代の各々が、それぞれなりに良識を持った善良な市民として、なるべく社会のお荷物にならないよう、できれば自分なりに社会に貢献できるよう、そして究極的には、心地よい自らの居場所を保持し続けられるよう心がけながら、ある程度のQOLを保持しつつ、けなげに生きていけば、それで十分なのではないだろうか。